
実数の集合論で可算順序数の概念を使う いくつかの面白い例の紹介

後藤 達哉
2025年12月18日作成

概要

本記事は Mathematical Logic Advent Calendar 2025 の 12 月 18 日の記事である。連続体の基数不変量などの実数の集合論では、自然数の組合せ論、実数の組合せ論はよく使うが、 ω_1 は出てくることが比較的少ないと思う。そのような中で、 ω_1 を使う議論をいくつか紹介する。具体的には第 1 章で Laver 木と Lebesgue 外測度の関係、第 2 章で $b = \omega_1$ が非可算な meager additive set の存在を導くこと、第 3 章で Laver 強制法および Hechler 強制法の rank argument を紹介する。

目次

1 Laver 木と Lebesgue 外測度	1
2 $b = \omega_1$ は非可算 meager additive set の存在を導く	2
3 Laver 強制法と Hechler 強制法における rank argument	4
3.1 Laver 強制法	4
3.2 Hechler 強制法	5

1 Laver 木と Lebesgue 外測度

Laver 木とは $\omega^{<\omega}$ の部分木 T であり、あるノード $s \in T$ があり、 s の下では分岐はなく、 s より上 (s を含む) のノードは全て無限分岐するものである。この s は T から一意に定まるから、それを $\text{stem}(T)$ と書く。

Laver 木全部の集合を \mathbb{L} と書く。

μ^* は Cantor 空間 2^ω の Lebesgue 外測度を表すものとする。

定理 1.1 (Pawlakowski [Paw96]). $\langle A_t : t \in \omega^{<\omega} \rangle$ を各 A_t が $A_t \subseteq 2^\omega, \mu^*(A_t) \leq a$ を満たし、かつ $A_t \subseteq \liminf_n A_{t \frown n}$ を各 $t \in \omega^{<\omega}$ について満たす族とする。このとき

$$\mu^*\left(\bigcap_{T \in \mathbb{L}} \bigcup_{t \in T} A_t\right) \leq a$$

となる。

証明. 族 $\langle A_t^\alpha : \alpha < \omega_1, t \in \omega^{<\omega} \rangle$ を次のように帰納的に定める。

$$\begin{aligned} A_t^0 &= A_t \\ A_t^{\alpha+1} &= \liminf_n A_{t \frown n}^\alpha \\ A_t^\gamma &= \bigcup_{\alpha < \gamma} A_t^\alpha \quad (\gamma \text{ is limit}) \end{aligned}$$

仮定より A_t^α は α について単調増大で、かつ外測度はどれも $\leq a$ である。

よって、各 $t \in \omega^{<\omega}$ について $\alpha_t < \omega_1$ が取れて、 $\mu^*(A_t^{\beta+1} \setminus A_t^\beta) = 0$ for every $\beta \geq \alpha_t$ となる。
 $\alpha = \sup_{t \in \omega^{<\omega}} \alpha_t$ と置く。したがって、

$$\mu^*(A_\emptyset^{\alpha+1} \cup \bigcup_{t \in T} (A_t^{\alpha+1} \setminus A_t^\alpha)) \leq a$$

となる。今、次を主張する：

$$\bigcap_{T \in \mathbb{L}} \bigcup_{t \in T} A_t \subseteq A_\emptyset^{\alpha+1} \cup \bigcup_{t \in T} (A_t^{\alpha+1} \setminus A_t^\alpha). \quad (1)$$

この主張 (1) を示せば、定理の証明も終わる。そこで主張を示そう。 $x \notin A_\emptyset^{\alpha+1} \cup \bigcup_{t \in T} (A_t^{\alpha+1} \setminus A_t^\alpha)$ とする。木の列 $\langle T_i : i < \omega \rangle$ を作り、各 T_i は高さ i 、各極大な元 $t \in T_i$ は $x \notin A_t^{\alpha+1}$ を満たすように作る。 $T_0 = \{\emptyset\}$ とおけば、 $x \notin A_\emptyset^{\alpha+1}$ より帰納法の基底ケースは問題ない。 T_i まで構成できたとする。 t が T_i の極大ノードのとき、 $A_t^{\alpha+1}$ の定義より集合 $X_t = \{n : x \notin A_{t^\frown n}^\alpha\}$ は無限集合である。

$$T_{i+1} = T_i \cup \{t^\frown n : t \text{ は } T_i \text{ の極大ノード}, n \in X_t\}$$

とおく。 $t^\frown n$ が T_{i+1} の極大ノードなら、 $x \notin A_{t^\frown n}^{\alpha+1} \setminus A_{t^\frown n}^\alpha$ より、 $x \notin A_{t^\frown n}^{\alpha+1}$ となり、帰納法の仮定は成り立ち続ける。最後に $T = \bigcup_i T_i$ と置けば、 $x \notin \bigcup_{t \in T} A_t^{\alpha+1}$ なのでこれで証明できた。□

この定理は Laver 強制法が Lebesgue 外測度を保つことを示す際の重要なピースである。

2 $\mathfrak{b} = \omega_1$ は非可算 meager additive set の存在を導く

Cantor 空間の部分集合 $X \subseteq 2^\omega$ が meager additive であるとは、任意の meager 集合 H について $X + H$ もまた meager となることを意味する。ここで $X + H = \{x + h : x \in X, h \in H\}$ である。なお Cantor 空間の元同士の和は成分ごとの modulo 2 の和で定める。

meager additive な集合が可算集合しかないことが無矛盾なことが知られている。また、連続体仮説の下で非可算な meager additive な集合が存在することは比較的簡単に示せる。以下の定理はその仮定を弱めたものである。

定理 2.1 (Bartoszynski [Bar03]). $\mathfrak{b} = \omega_1$ ならば、非可算 meager additive set が存在する。

証明。 $\mathfrak{b} = \omega_1$ を仮定する。すると列 $\langle f_\alpha : \alpha < \omega_1 \rangle$ であって \leq^* の意味で単調増大かつ非有界な ω^ω の狭義単調増加関数からなるものがとれる。 $2^{<\omega}$ の部分完全木を要素とする ω_1 木 (T, \supseteq) を構成する。 T_α を T のレベル α とする。次の条件を要請する。

- (1) 任意の $\alpha < \beta < \omega_1$ と $n \in \omega$ と $p \in T_\alpha$ について、ある $q \in T_\beta$ があって、 $q \subseteq p$ かつ $q \cap 2^n = q \cap 2^n$ 。
- (2) 任意の $\alpha < \omega_1$ と $p \in T_{\alpha+1}$ について、有限個を除いた全ての自然数 n で $p \cap 2^{f_\alpha(n)} \leq 2^n$ が成立する。
- (3) 任意の $\alpha < \omega_1$ について T_α は可算。

この T を下から順に構成しよう。

ベースステップ。 $T_0 = \{2^{<\omega}\}$ 。

後続ステップ。 T_α が構成されたとする。 $p \in T_\alpha$ とする。次のような $\langle q_n : n \in \omega \rangle$ を取る。

- (1) $q_n \subseteq p$ for every n .
- (2) $q_n \cap 2^n = p \cap 2^n$ for every n .

- (3) $[q_n] \cap [q_m] = \emptyset$ for every $n \neq m$.
- (4) 任意の n について, 有限個を除いた全ての k で $|q_n \cap 2^{f_\alpha(k)}| \leq 2^k$.

つまり, 完全集合 $[p]$ の部分集合を可算個の完全集合 $[q_n]$ たちに分割しつつ, (2) のように q_n と p は下の方では変わらないようにし, (4) を満たすくらい各々が薄い木となるようにするのである. これは可能である.

各 $p \in T_\alpha$ についてこのような $\langle q_n : n \in \omega \rangle$ を取り, レベル $T_{\alpha+1}$ に置く.

極限ステップ. γ を極限順序数, T_α ($\alpha < \gamma$) を構成済みと仮定する. $p \in \bigcup_{\alpha < \gamma} T_\alpha$ と $n \in \omega$ を固定する. $q = q(p, n)$ を以下のように定め, γ レベルにこの q を置く. 列 $\langle \alpha_k, n_k, p_k : k \in \omega \rangle$ を構成して次を満たすようにする. $p_0 := p, n_0 := n$ とする.

- (1) $p_k \in T_{\alpha_k}$,
- (2) $\sup_k \alpha_k = \alpha, \lim_k n_k = \infty$,
- (3) $p_{k+1} \subseteq p_k$,
- (4) $p_{k+1} \cap 2^{n_k} = p_k \cap 2^{n_k}$.

数列 $\langle n_k : k \in \omega \rangle$ を十分増大度を大きくなるように以上の構成を行えば, $q := \bigcap_k p_k$ は完全木となる.

以上で木 T を構成できた.

各 $p \in T$ について $x_p \in [p]$ を選択し, $X = \{x_p : p \in T\}$ とおく. X の濃度が \aleph_1 になるように x_p たちを選ぶことが可能である.

この X が meager additive set であることを証明しよう.

H を meager set とする. よく知られた事実 (たとえば [Bla10] の Theorem 5.2) より $x_H \in 2^\omega$ と狭義単調増大関数 $f_H \in \omega^\omega$ が取れて,

$$H \subseteq \{x \in 2^\omega : \forall^\infty n \ \exists j \in [f_H(n), f_H(n+1)) \ x(j) \neq x_H(j)\}$$

となる. 証明すべきことは $X + H$ が meager なことであるので, 平行移動を施して, $x_H(k) = 0$ for all k を仮定して良い. $\langle f_\alpha : \alpha < \omega_1 \rangle$ は非有界な族であるので, ある $\alpha_0 < \omega_1$ が取れて,

$$\exists^\infty n \ \exists k \ f_{\alpha_0}(n) < f_H(k) < f_H(k + 2^n) < f_{\alpha_0}(n+1)$$

となる.

理由. 背理法. 全ての α について

$$\forall^\infty n \ \forall k \ [f_\alpha(n) \geq f_H(k) \text{ or } f_H(k + 2^n) \geq f_\alpha(n+1)]$$

と仮定する. 各 $n_0, m \in \omega$ について関数 $G_m^{n_0}$ を

$$\begin{aligned} G_m^{n_0}(n_0) &= m \\ G_m^{n_0}(n+1) &= f_H(k_n + 2^n) + 1 \\ (\text{where } k_n &= \min\{k : f_H(k) > G_m^{n_0}(n)\}) \end{aligned}$$

とおく. $G_m^{n_0}$ ($n_0, m \in \omega$) を全部 dominate する G を取る.

$\alpha < \omega_1$ を固定する. 背理法の仮定より $n_0 \in \omega$ が取れて,

$$\begin{aligned} \forall n \geq n_0 \ \forall k \ f_\alpha(n+1) &\leq f_H(k_n^* + 2^n) \\ (\text{where } k_n^* &= \min\{k : f_H(k) > f_\alpha(n)\}) \end{aligned}$$

となる. $m := f_\alpha(n_0)$ とおく. n に関する帰納法で $\forall n \geq n_0 \ f_\alpha(n) \leq G_m^{n_0}(n)$ を示す. ベースケースは OK.

$f_\alpha(n) \leq G_m^{n_0}(n)$ を仮定すると $k_n^* \leq k_n$ が従う. よって

$$f_\alpha(n+1) \leq f_H(k_n^* + 2^n) \leq f_H(k_n + 2^n) < G_m^{n_0}(n+1)$$

となる. したがって, f_α は $G_m^{n_0}$ に dominate される. つまり G にも dominate される.

$\alpha < \omega_1$ は任意だったので, これは $\langle f_\alpha : \alpha < \omega_1 \rangle$ が非有界なことに矛盾.

$\langle n_i, k_i : i < \omega \rangle$ で

$$\forall i \quad f_{\alpha_0}(n_i) < f_H(k_i) < f_H(k_i + 2^{n_i}) < f_{\alpha_0}(n_i + 1) \quad (2)$$

となるものを取る.

$p \in T_{\alpha_0+1}$ を固定する. $z_p \in 2^\omega$ を次のように定める. まず, 与えられた十分大きな i について $p \cap 2^{f_{\alpha_0}(n_i)}$ の枚挙 $\langle s_j^i : j < 2^{n_i} \rangle$ を取る. z_p は各 s_j^i と区間 $[f_H(k_i + j), f_H(k_i + j)]$ 内で一致するようになるのである. 各区間は (2) より重なっていないことに注意. どの区間にも入っていない添字での z_p の値は何でもいい.

$$G_p := \{x \in 2^\omega : \forall^\infty i \quad x \text{ と } z_p \text{ は区間 } [f_{\alpha_0}(n_i), f_{\alpha_0}(n_i + 1)] \text{ で agree しない}\}$$

とおく. 各 G_p は meager である. 今, $[p] + H \subseteq G_p$ を主張する. $x \in [p] + H$ とする. すると $y \in [p]$ がとれて,

$$\forall^\infty k \quad x \text{ と } y \text{ は区間 } [f_H(k), f_H(k + 1)] \text{ で agree しない}$$

となる. 十分大きな i について, ある j があって,

$$y \upharpoonright [f_H(k_i + j), f_H(k_i + j + 1)] = s_i \upharpoonright [f_H(k_i + j), f_H(k_i + j + 1)] = z_p \upharpoonright [f_H(k_i + j), f_H(k_i + j + 1)]$$

となるが, これは

$$x \upharpoonright [f_H(k_i + j), f_H(k_i + j + 1)] \neq z_p \upharpoonright [f_H(k_i + j), f_H(k_i + j + 1)]$$

を含意する. よって区間をより広げた

$$x \upharpoonright [f_{\alpha_0}(n_i), f_{\alpha_0}(n_i + 1)] \neq z_p \upharpoonright [f_{\alpha_0}(n_i), f_{\alpha_0}(n_i + 1)]$$

も成立する. これは $x \in G_p$ を意味する.

$X_{\alpha_0} = \{x_p : p \in \bigcup_{\alpha \leq \alpha_0} T_\alpha\}$ とおく (X の定義のところで選択した点のうち $\bigcup_{\alpha \leq \alpha_0} T_\alpha$ から来るもの全部). X_{α_0} は可算集合なので, $X_{\alpha_0} + H$ は meager である. また, $\bigcup_{p \in T_{\alpha_0+1}} [p] + H \subseteq \bigcup_{p \in T_{\alpha_0+1}} G_p$ も meager set の可算和なので, meager である. したがって,

$$X + H \subseteq (X_{\alpha_0} + H) \cup \bigcup_{p \in T_{\alpha_0+1}} ([p] + H)$$

も meager となる. □

3 Laver 強制法と Hechler 強制法における rank argument

この節では強制法の知識を仮定する.

3.1 Laver 強制法

本節の内容は [BJ95] を参考にした.

第 1 節で考察した, Laver 木の集合 \mathbb{L} に次の順序を入れる: $T' \leq T \iff T' \subseteq T$.

また次の順序も考える : $T' \leq_0 T \iff T' \leq T \wedge \text{stem}(T') = \text{stem}(T)$.

$T \in \mathbb{L}$ と $s \in T$ に対し $T_s = \{t : s \subseteq t \text{ or } t \subseteq s\}$ とおく. これは s より下にある分岐を全部刈り取つてできる新しい \mathbb{L} の条件である.

$D \subseteq \mathbb{L}$ を開かつ稠密な集合とする. $T \in \mathbb{L}$ と $s \in T$ に対し, そのランク $r_T(s)$ を次で定める.

- (1) $r_T(s) = 0$ となるのは $T' \leq_0 T_s$ が存在して $T' \in D$ となるとき.
- (2) $r_T(s) \neq 0$ のとき,

$$r_T(s) = \min\{\alpha : \exists U \in [\omega]^\omega \forall n \in U r_T(s \cap n) < \alpha\}.$$

任意の $s \in T$ に対して, $r_T(s)$ は定義される. 実際, $r_T(s_0)$ が定義されない s_0 があるとしたら, $\{n : r_T(s \cap n) \text{ が定義されている}\}$ が有限集合となる. すると帰納法により $S \in \mathbb{L}, S \leq T_{s_0}$ を作って, 任意の $s \in S$ について $r_T(s)$ が定義されていないようにできる. $S' \leq S$ を $S' \in D$ なる元とする. しかし, すると $r_T(\text{stem}(S')) = 0$ となって矛盾.

またランクに関する帰納法で $T' \leq T$ かつ $s \in T'$ のとき $r_T(s) \leq r_{T'}(s)$ もわかる. さらに T' と T で s より上を変えていない ($T_s = T'_s$) ときには, 逆向きの不等号も言えて, $r_T(s) = r_{T'}(s)$ となる.

以下が Laver 強制法の pure decision と呼ばれる性質である.

定理 3.1. $A \in [\omega]^{<\omega}$ とし, $T \Vdash_{\mathbb{L}} \dot{a} \in A$ とする. すると $T' \leq_0 T$ と $a \in A$ が存在して $T' \Vdash \dot{a} = a$ となる.

証明. $D = \{T' \in \mathbb{L} : T$ は \dot{a} の値を決定している } とおく. D は開かつ稠密な集合である. D に関するランク関数を r で表す. $r_T(\text{stem}(T))$ に関する帰納法で定理を示す.

$r_T(\text{stem}(T)) = 0$ ならば, r の定義より結論は明らか. $r_T(\text{stem}(T)) = \alpha > 0$ としよう. するとある $U \in [\omega]^\omega$ があって, 全ての $n \in U$ で $r_T(\text{stem}(T) \cap n) < \alpha$. よって, 定理の前の注意を使うことで, $r_{T_{\text{stem}(T) \cap n}}(\text{stem}(T) \cap n) < \alpha$ でもある. 帰納法の仮定より各 $n \in U$ について $T^n \leq_0 T_{\text{stem}(T) \cap n}$ があって T^n は \dot{a} を決定している. 必要に応じて U を縮めることで, T^n ($n \in U$) が決定している \dot{a} の値は一定だとしてよい (A は有限集合なことに注意). そこで $T' = \bigcup_{n \in U} T^n$ とおけばこれが所望の条件である. \square

3.2 Hechler 強制法

本節の内容は [Bre09] を参考にした.

記号の乱用で自然数の無限集合 A に対して $A(n)$ でその小さい方から数えて n 番目の要素を表す.

Hechler 強制法を $\mathbb{D} = \{(s, \varphi) : s \in \omega^{<\omega}, \varphi : \omega^{<\omega} \rightarrow \omega\}$ かつ $(t, \psi) \leq (s, \varphi)$ を $s \subseteq t$, ψ は φ を everywhere dominate する, かつ任意の $i \in |t| \setminus |s|$ について $\varphi(t \upharpoonright i) \leq t(i)$ と定める.

\dot{A} を ω の無限部分集合の \mathbb{D} -name とする. $s \in \omega^{<\omega}$ と $n, k \in \omega$ について, s が $\dot{A}(n) = k$ を好むとは, 第一成分が s の条件であって, $\dot{A}(n) \neq k$ を強制するものは存在しないことを意味する.

ランク $r_n(s)$ を次で定める.

- (1) $r_n(s) = 0$ iff ある k について, s が $\dot{A}(n) = k$ を好む
- (2) $r_n(s) \neq 0$ のとき $r_n(s) = \min\{\alpha : \exists^{\infty} l r_n(s \cap l) < \alpha\}$.

$r_n(s)$ は全ての n, s について定まる. 実際, $r_n(s)$ が未定義な s があったとしよう. するとほとんどの全ての l について $r_n(s \cap l)$ も未定義である. したがって, 次のような $\varphi : \omega^{<\omega} \rightarrow \omega$ を構成できる: $s \subseteq t$ かつ, $\varphi(t \upharpoonright i) \leq t(i)$ for all $i \in |t| \setminus |s|$ ならば, $r_n(t)$ は未定義. 条件 (s, φ) を考えよう. 条件

$(t, \psi) \leq (s, \varphi)$ で, \dot{A} の第 n 要素がある k であることを強制するものを取る. すると $r_n(t) = 0$ である. しかし, $r_n(t)$ は未定義であったので矛盾.

自然数の無限集合 A, B に対して, B が A を split するとは, $B \cap A$ と $B \setminus A$ の両方が無限集合となることを意味する.

定理 3.2. \dot{A} を ω の無限部分集合の \mathbb{D} -name とする. すると $\langle A_i : i \in \omega \rangle$ があって, $B \in [\omega]^\omega$ が全ての A_i を split するならば, $\Vdash_{\mathbb{D}} B$ は \dot{A} を split する.

証明. $s \in \omega^{<\omega}$ とする. もし $r_n(s) = 0$ となる n が無限個ある場合は, そのような n について k_n を見つけ, s が $\dot{A}(n) = k_n$ を好むようにする. $k_n \geq n$ であることに注意. $A_s = \{k_n : r_n(s) = 0\}$ とおく.

$s \in \omega^{<\omega}, n \in \omega$ とし, $r_s(n) = 1$ と仮定する. すると無限個の l があって, $r_n(s \frown l) = 0$ である. そのような各 l について, $s \frown l$ が $\dot{A}(n) = k^{s,n,l}$ を好むようにとる. $A^{s,n} = \{k^{s,n,l} : l \in \omega, r_n(s \frown l) = 0\}$ とおく. $A^{s,n}$ は無限集合である. 実際, 各 $k \in \omega$ について $\{l : k^{s,n,l} = k\}$ は有限集合となる. なぜなら, もしこれが無限集合だったら, k を witness として $r_n(s) = 0$ となるからである.

さて, もし B が全ての $A_s, A^{s,n}$ たちを split するなら $\Vdash "B$ は \dot{A} を split する”を示そう.

(s, φ) を条件とし, $m \in \omega$ とする. 次を示す必要がある: $(t, \psi) \leq (s, \varphi)$ と $m_0, m_1 \geq m$ があり, $m_0 \in B, m_1 \notin B$ かつ $(t, \psi) \Vdash m_0, m_1 \in \dot{A}$.

まず, 無限個の n が存在して, $r_n(s) = 0$ だと仮定しよう. すると $B \cap A_s$ と $A_s \setminus B$ はともに無限集合だから, $m_0, m_1 \geq m$ で $m_0 \in B \cap A_s$ かつ $m_1 \in A_s \setminus B$ なものを見つけられる. A_s の定義より, ある n_0, n_1 があって s は $\dot{A}(n_0) = m_0$ と $\dot{A}(n_1) = m_1$ の両方を好む. すると $(s, \varphi) \not\Vdash \dot{A}(n_0) \neq m_0 \wedge \dot{A}(n_1) \neq m_1$ なので, ある $(t, \psi) \leq (s, \varphi)$ が取れて, $(t, \psi) \Vdash m_0, m_1 \in \dot{A}$.

次に, 有限個を除いた全ての n で $r_n(s) > 0$ だと仮定する. $r_n(s) > 0$ なる $n \geq m$ を固定する. このとき, s の延長 t であって, $\varphi(t \upharpoonright i) \leq t(i)$ for all $i \in |t| \setminus |s|$ かつ $r_n(t) = 1$ となるものを取り取ることができる.

実際, これは $r_n(s)$ に関する帰納法で示される. $r_n(s) = 1$ なら $s = t$ と取ればよい. $r_n(s) > 1$ ならば, $l \in \omega$ であって, $l \geq \varphi(s)$ かつ $1 \leq r(s \frown l) < r_n(s)$ となるものを取れる. 帰納法の仮定により $s \frown l$ は所望の t に延長できる.

さて, $B \cap A^{t,n}$ は無限集合だから, $l \geq \varphi(t)$ であって, $k^{t,n,l} = m_0$ であって, $m_0 \in B \cap A^{t,n}$ となるものが取れる.

よって, $t \frown l$ は $\dot{A}(n) = m_0$ を好む. ゆえに, 条件 $(u, \psi) \leq (s, \varphi)$ を見つけて, $(u, \psi) \Vdash m_0 \in \dot{A}$ となる.

m_0 だけ見つけたが, m_0, m_1 両方を見つけることも同じ議論で確かめられる. [TODO: ここをちゃんと書く]

□

参考文献

- [Bar03] T. Bartoszynski. “Remarks on small sets of reals”. *Proceedings of the American Mathematical Society* 131.2 (2003), pp. 625–630.
- [BJ95] T. Bartoszynski and H. Judah. *Set Theory: on the structure of the real line*. CRC Press, 1995.
- [Bla10] A. Blass. “Combinatorial cardinal characteristics of the continuum”. *Handbook of set theory*. Springer, 2010, pp. 395–489.

- [Bre09] J. Brendle. “Forcing and the structure of the real line: the Bogotá lectures”. *Lecture notes* (2009).
- [Paw96] J. Pawlikowski. “Laver’s forcing and outer measure, Set theory (Boise, ID, 1992–1994), 71–76”. *Contemp. Math.* 192 (1996).